

日英交通史料（十四）

(Bibliography of Anglo-Japanese Relations XIV)

武 藤 長 藏

(254)

England's Quest of Eastern Trade by Sir William Foster, C. I. E. President of the Hakluyt Society
Formerly Historiographer to the India Office

この書の内次の章が日英交通史に直接關係がある

Chapter XIV. The Foundation of the East India Company

- ” XV.
- ” XVI.
- ” XVII.
- ” XVIII.
- ” XIX.
- ” XX.

„ XXI. The Establishment of English Trade with Japan

大日本史料^{第十二編}後水尾天皇自元和元年至同二年正月に平戸英商館長コックス日記 (Diary of Richard Cocks) の數節を引用し邦譯してある其内千六百十五年六月十九日の條に「初メテ甘薯ヲ日本ニ植ユ」なる見出の下に次の譯文がある。

十九日○中略元和元年六月四日に當る 此日、予は菜園を借受け、琉球より齋し、薯を植ふたり、こは嘗て日本に植ふたることなきものなり、予は此菜園の爲に年額十匁即ち英貨五シリングを拂ふ筈なり。○略

右譯文の原文は本稿日英交通史料「一」に「三」として掲げた Diary of Richard Cocks Cape-Merchant in the English Factory in Japan 1615-1622 with Correspondence Edited by Edward Maunde Thompson の原文又は「4」として載せた Japanese Edition の第一卷第十一頁に掲げてある。即ち次の如し。

June 19, ⁽¹⁶¹⁵⁾ I tooke a garden this day and planted: it with Potattoo brought from the Liquea, a thing not yet planted in Japan. I must pay a tay, or 5 shillings sterling, per annum for the garden
(Diary of Richard Cocks Vol. I. p. 11)
July 29, ⁽¹⁶¹⁸⁾ I set 500 small potato rootes in a garden, Mr. Eaton sent me them from Liques.

(Diary of Richard Cocks, Japanese Edition with Additional Notes By N. Murakami Vol. II. p. 59)

此事は大阪朝日新聞社發行開國文化收錄拙稿「日英交通史概觀」改造社版經濟學全集第二十八卷世界經濟史收錄拙稿「日英交通史」第三百八十六頁に書いて置いた。

(附註) 明治四年十一月大阪朝日新聞社發行開國文化收錄拙稿「日英交通史概觀」に、初期日英交通史上の重要人物アダムスセーリス及びコックス等の書翰航海記、日記等の學術史的社會史的文化的交通史的及び商業史的價值第四百四十六頁に此事を次の如く書いて置いた。

「コックスは其 Garden に Potatoes を移植したと書いて居ります、琉球では Potatoes の花は綺麗に咲くと云ふ事ですから花を賞する意味も含まれてあつたかも知れませぬ。」

但し、琉球では Potatoes の花は綺麗に咲く云々以下は取消して置く。次に改造社版經濟學全集第二十八卷世界經濟史收錄「日英交通史」にも同一題目にて書いて置いた。但し賞花の事は削つて置いた。題目中「コックス」と印刷され居るはコックスの誤植。

(256)

大日本史料^{第十二編}後水尾天皇^{自元和二年二月至同年四月}リチャルドコックス日記 (Diary of Richard

Cocks) Vol. I. pp. 99, 103, 124-126, 128, 140-146, 150, 157, 163, 207 の千六百十六年一月十四日^{新曆二十四日にして、元和元年十二月六日に當る}諸大名竝に其妻に江戸滯留を命ずとの説に就ての記事、一月二十四日には家康薨去の風説に就て記す。

Letters Received by the East India Company

From its Servants in the East Vol. IV. 1616

352. Richard Cocks to Richard Wickham at Osaka or Miako.

per conveyance of Captain Jacob Speck.

Hirado, March 30, 1616.

.....

.....

369. Richard Cocks to Richard Wickham [at Miaco or elsewhere].

Hirado, June 22, 1616.

〔東邦に在る使備人より東インド商會に贈りし書翰〕四

第三百五十二號千六百十六年三月三十日 新曆四月九日にして、元和二年二月二十三日に當る 附平戸發、リチャルド・コ

ックスよりキャプテン・ヤコブ・スベックスに托して大阪又は都のリチャルド・ウィツカ
ムに贈りし書翰の數節を引用す。

而して千六百十六年三月三十日附平戸リチャルド・コックスより大阪又は都のリチ
ヤルド・ウィツカムに贈りし書翰のうち四月一日まで留置 (kept till the 1st of April) の分
には

Here is flying reports that the Emperor is dead; others say that Frushma Tay is killed, coming from
Ido to Miako; which is the occasion the King of Shashma taketh this voyage, pretending war.

即ち家康薨去と福島正則并に島津氏に關する風説等を報じて居る。

又四月三日まで留置 (kept till the 3rd of April) にて The doubtful news of the Emperor's death continueth still. The King of Shashma is in the road of Hirado still, except he went out this night past. と書いて居る。

又千六百十六年六月二十二日附平戸宛書翰には

369. Richard Cocks to Richard Wickham [at Miako or elsewhere].

Hirado, June 22, 1616 [Extract]

The King of this place arrived five or six days past, and the General report is the Empire is dead and of enly buried in sight of all the Tones before they returned.

とある。

この東邦に在る使備人より東インド商會に贈りし書翰集 (Letters received by the East India Company from its servants in the East.) の第一卷 (Vol. I) 1602-1613 に就ては拙稿日英交通史料 (一) 收錄 (7) に述べて置いた。又私はこの第一卷を手に入れた。しかしこの大日本史料第十二編之二十四に引用の此書翰集第四卷 (Vol. IV) は未だ手に入らぬ故に大日本史料第十二編之二十四に引用された儘を茲に示して置くに止めた。

大日本史料第十二編 後水尾天皇 自元和二年五月至同年是歲

〔リチャルド・コックス日記〕

一六一六年七月二十七日 ○新曆八月六日にして、元和二年六月二十四日に當る 神が風と天候とを許し給はゞ我等は明日皇帝の宮廷に赴かんと欲し諸物を積めり。

Diary of Richard Cocks. Vol. 1. pp. 157—216

July 27. — × × × × × × ×

× × × × × × ×

We put all matters aboard to goe towards the Emperours Court tomorrow, God permitting wynd and welter.

千六百十六年八月十二日 (新曆十二月二日にして、元和二年七月十日に當る)

イートン君、未明に大阪(Osaka)に歸りを以て、我等は江戸(Edo)に向ひ出發し、枚方(Fragata, Hirakata)にて晝食をなし、斯くて此夜伏見(Fushima, Fushimi)に宿泊せり、宿泊料は八十八匁に上りぬ。

予は次の事を記さざる可らず、伏見(Fushima, Fushimi)に達する前、我等が河岸を通過せし時、惡漢の爲めに殺害せられし人の死骸岸に横はれるを見たり、然も土民は之を放置して埋葬せざりき、又對岸には商人の從僕を殺せし爲め磔刑に處せられし者あり、尙他の場所には罪人の首級八箇或は十箇を

大道の傍に丸太の上に並べしを見たり、諸人皆兇惡無殘の輩なるを以て此の如き嚴罰を加ふるに非ざれば彼等の生活すること不可能なり、更に京都(Miako)を去る三リーグ(3 leagues)なる伏見(Fushima, Fushimi)に到着せし際、聞きし所に依れば惡漢數名、大判三十枚(30 bars Oban)を携へし守兵を襲撃し、日中該金を奪ひ去れりと、該金は坊主(boss)の殺害者を發見する者の報酬として提供せられしものなり「之を爲ししは恐らく殺害者なるべし」此報道に就ては予は其眞僞も詳にせず、但此兇惡の輩は、多人數を殺害すべしと誓へる由なり。

(大日本史料第十二編之二十五第四百四十六頁より四百四十七頁參照)

右強賊橫行の記事と本稿日英交通史料(三)收錄日本歴史地理學會編纂日本交通史論後篇收載文學博士大類伸氏稿「三百年前に於ける外人の日本旅行」中にコックス日記に就いて論ぜられし一節に「外人の安全なる旅行」なる見出し(但しこれは編纂者が附したるもの乎)の下に次の如く書いてある一節と對照して其眞相を察知すべきである。

コックス日記を讀んで、まづ第一に感ぜられることは三百年前外人の旅行が當時の日本人の旅行と甚しい差がなかつたと云ふことである、即ち外國人も日本人同様に安心して旅行が出来た有様が推測されるのである、固よりコックス日記の記事のみに依つて此く斷定するのは早計であるかも知れぬ、併し同書に現はれた所に依れば不安な旅行ではなかつたと云て宜しい、一片の鱗で龍の全體を推すのは場

合に依ては不可能であらうが、コックス日記の場合は左程妄斷ではあるまいと思ふ、但し大阪落城の翌年、殊に家康の歿後間もないことで、世態不穩の時代であるから旅行に警戒を要したのは云ふまでもないが、其の警戒の事實が著しく記載されて居らぬ、たゞ八月十三日の條に伏見から草津に赴く途中で携帯した荷物と人間と一處に旅行しないで荷物だけを半日行程丈け先へ送り出したことがある、而してそれは危害を避ける爲めだと記して居る、是は外國商人が荷物を携へて居ると追剝や強盜に罹る虞があつたこと、思はれる云々

(日本歴史地理學會編日本交通史論第六百二十二頁より第六百二十三頁參照)

尙大類博士のこの文の續きは同じく大日本史料第十二編之二十五の邦文欄第五百十七頁の堺より大阪までの夜道の記事に就て次に引用しそれと對照して掲げる事とする。さてこの大日本史料第十二編之廿五の英文欄コックス日記 (Diary of Richard Cocks Vol. I) より引用の八十七頁及邦文欄第五百十七頁に其譯文として次の記事がある。

我等の定宿の主人は槍持三名をして我等を大阪まで送らしたり斯く槍を携へしめしは夜遅きが爲めなりき

(大日本史料第十二編之二十五所載譯文に據る、同書英文欄八十七頁及邦文欄第五百十七頁參照)

日英交通史料(三)收錄120日本歴史地理學會編纂日本交通史論後篇收載文學博士大類仲

氏稿三百年前に於ける外人の日本旅行中にコックス日記中外人の安全なる旅行をなし得た例として右千六百十六年十一月十八日の條に就て次の如く書いてある。

「十一月十八日の條に夜間堺から大阪の旅宿に歸つた時、堺の旅宿の主人は三名の者に槍を携へてコックスを送らしめたが、是は夜遅いからであつたと書いて居る。此等も途上警戒の一例であらう。併し此の二項の記事以外に警戒とか不安とか云ふ事實は見えて居らぬ、況や外國人なるが故に特別に迫害された様な形跡は全く認められない。」(同書第六百二十三頁參照)

次に大日本史料第十二編之二十五第五百十八頁に千六百十六年十一月十九日の條中に左の一節がある。

又イートン君より、ジョージ・デュロイスに對し、我等の爲めに、長崎にて仕拂ひ置きし金額を、左の如く仕拂ひたり、

檸檬及び蜜柑花の砂糖漬	一壺	四五匁〇
蜜柑花及び桃の砂糖漬	一壺	四〇、〇
クインス樹二本及び植付け用玉葱	二籠	一一、〇

以下省略

とある。今原文コックス日記 (Diary of Richard Cocks) 第一卷第二百〇九頁所載千六百

十六年十一月十九日の條を見るに

And ther was paid unto Jorge Durois per Mr. Eaton, for money disbursed at Langsaque for us, as followeth, viz: —

	ta	m	c
1 jar conserves of lemons and orange flowers	04	5	0
1 jar conser of orange flowers and peaches	04	0	0
2 quince trees and 2 baskies of ouyons to sett	01	1	0

とある。

檸檬は支那語辭典には Ning Mang the lemon と説明してある如くレモンの發音をとりたる文字であるが蜜柑花の砂糖漬 (Conserves of orange flowers) は今日では珍しく私共の實際見た事のないものではあるが十七世紀のはじめ頃には長崎にて見受けたものと思はれる。

次にクインス樹 (Quince trees) ニ一本を買求めたのはパン (Pan, Pao bread) につけるジャム (Jam) 即ちマルメラデー (Marmalade) (果糕の原料となる果實をとる爲めであると私は解する。

熊本の小川侯爵家の御用菓子であつた名産カセイダも其原料はマルメロ (Marmelo) で

あるからマルメラデー(Marmelade)に外ならぬと思ふ。葡萄牙語の Marmelade と Marmelo との語源的關係を考察すれば私の推斷は正しいと思ふ。尙故理學博士白井光太郎氏著植物渡來考に「マルメル」に就て其來歴の部に

東洋の原産にして歐洲南部に栽培せらる大和本草にマルメルは楨桴に充うずとあり……大和……京にてマルメルと云ふ東北國に多し……大和本草にマルメルは蠻語なるべし是蠻國より來りて中華には無之乎花は頗るよし實かせいたに作るとあり、又長崎兩面鏡に寛永十一年マルメル長崎に來るとあり。

(同書第百九十五頁より第百九十六頁參照)

大正十四年九月發行牧野富太郎氏著日本植物圖鑑第千〇七十二頁に

まろめろ Cydonia Vulgaris, Pers

〔產地〕歐洲原産ニシテ所々ニ培養スル落葉ノ果樹ナリ〔效用〕果實ハ甘酸ニシテ生食スベク、罐詰ニス。とある Quince のジャムの罐詰は西洋に多く用ひられて居る。

大日本史料^{第十二編}之二十六^{後水尾天皇} 白元和二年^{至同三年三月}雜載 コックス日記 (Diary of Richard Cocks) 第一卷

(Vol. I) 中の記事を七回分割して引用す。

又別に Letters received by the East India Company from its servants in the East Vol. IV. 中より一回引用す茲にはたゞリチャルド・コックス日記中千六百十六年二月十九日の條より船

積證書 (bill of lading) に關する記事のある部分其他二三を引用するに止めたい。

〔リチャルドゴックス日記〕(歐文材料第九號譯文に "bill of lading" を船積證書(同書第二八八頁)と譯しあるは今日の所謂船荷證券である。譯文は次の如くである。

キャプテン、スベックは予に書狀を送り、ホジャンダー號の船長或は事務長をして、同船にて送る黒檀九百二十七本の船積證書を作らしめんことを求めたり、彼の言に依れば、その重量は九萬二千九百斤なり、依りて事務長ローランド・トーマスは重量を記せず、本數を記し、之をバンタムに在る蘭人に交付すべしとの證書二通を作り、彼に與へたり。

(大日本史料第十二編之二十六第二八八頁參照)

これによれば十七世紀の初葉に船荷證券 (bill of lading) なる商用語の行はれた事を察する事が出来る。bill of lading の起原の研究は暫らくおき既に西曆千五百五十五年八月五日倫敦にて作成された海上保險證券のクロース (Clause) の内に bills of lading なる文言がある。即ち次の如し

And we will that he shall not be bounde to bringe any billes of ladinge but onely the charge of his othe. とある。私は今故 William Gow 氏著 Marine Insurance London, 1903 の p. 323. 所載 Appendix 中 A. D. 1555. File 29, No. 45. policy of assurance; 中

In London the 15th of August 1555.

.....

.....

とある。千五百五十五年八月五日附倫敦に於ける保險證券(Policy of Assurance)のクロ
ーズ中より之を摘記したのである。

私にこのクローズの事を告げられたのは我校勝呂教授であつた。同氏は William Gow,
Marine Insurance, revised by King-Page. London 1931 p. 344 に載せられて居る事又原文は
Marsden, "Select Pleas in the Court of Admiralty" Vol. ii p. 49 にある筈であると報ぜられた。
ガウ氏著海上保險初版にはこの保險證券を This is the earliest policy in England yet discovered
(1899)と註釋して居る。

何れにせよ十六世紀中葉英國にて船荷證券(bills of lading)の存せし事を示す文献で
ある。果して然らば日英交通史料たるコックス日記中に船荷證券(bill lading)なる商
用語の現はれて居るのは當然である。たゞ第十七世紀初葉我國と貿易せし英人の日
記中に見出されたのは貴重なる史料の一つであると思ふ。この事は商業經濟、法律學
者等の未だ注意せざりし事柄であるから私は茲に紹介した次第である。

(附註) 私は Bill of Lading の参考文献として Lex Mercatoria Rediviva : or, The Merchant's Dictionary, By Wyndham Beaves. London M. DCCCLII. 其他は今村有教授より借覽し又自ら氣がついて Origins of the Early English Maritime and Commercial Law By Frederic Rockwell Sanborn 等も参考に讀んだ事を茲に附記して置く。

次に大日本史料第十二編之二十六第二九五頁に

予は倉庫建築につき再び大工と協議せり

とある平戸英國商館の倉庫の原文は Godong と記す、これマレー語の發音をとりたる Godown 也。Godong, Gudang とも稱す、Godown に就ては An Abridged Malay—English Dictionary By R. J. Wilkinson の Gudang, a store-house ; a godown の部 Century Dictionary の Godown の部等参照。

(260)

大日本史料第十二編後水尾天皇

自元和三年四月至同年八月

リチャルド・コックス日記 (Diary of Richard Cocks) 千六百十七年八月十九日 (August 19, 1617) の條にある英人の贈物に大幅黒ヘルペトワン (black broad Perpetuano) 其他種々のヘルペトワンが繰返して書いてある。このヘルペトワンは我校柴崎文庫にて買求めた嘉永六丑年の見本帳にも繰返して見本が示されてある。

次にコックス日記 (Diary of Richard Cocks) 千六百十七年十月一日の條に左の一節があ

る。

October 1 (12th Congnuch).—Wrot an other letter to Mr. Wickham of receipt of his, as also that the present I had receved a letter from Semi Dono, whce very earnestly desireth to have vijatta broad cloth, to pry for it 6 wickes hence at his arrivall at Firando. So I advised Mr. Wickham to let hym have it, taking his bill for payment, and, yf he will pay any ready money, to receive it and put it on the bill or shorten it on acco.

右一節の大日本史料^{第十二編}後水尾天皇^{自元和三年四月至同年八月}所載譯文は次の如くである。

〔リチャルド・コックス日記〕西曆千六百十七年

(九月)

十月一日(コングワチ十二日)○新曆十一月にして元和三年九月十二日に當る 予はウィツカム君に宛て又一書を認め、彼の書狀を

受取りたる事、及び只今主馬殿の書狀を受取りたるが、大幅羅紗七間を購ひ、六週間後、彼の平戸到着の上支拂をなさんことを熱心に希望せる事を報じたり、依て予はウィツカム君に勧め羅紗を彼に與へ、支拂手形を受取り、彼若し何程にても現金支拂をなさば之を手形に記入するか又は勘定を減せんことを求めたり、(大日本史料第十二編之二十七第六百七十六頁參照)

以上引用せし譯文中 taking his bill for payment をば「支拂手形を受取り」と譯しあるは誤ならずや。此場合 bill は爲替手形 bill of exchange にあらず證書と解すべきものと思はる。

O. U. の如きものならずや。簿記にて支拂手形は bills payable である。bills for payment ではない。I. O. U. に就て Bertram Jacobs 氏著 A short Treatise on the Law of Bills of Exchange, Change Promissory Notes, and Negotiable Instruments Generally p. 46 以下に I. O. U's—An I. O. U. is an instrument given by a debtor to his creditor acknowledging the debt である。

(260) 大日本史料第十二編之二十七のうち

キャプテン・スベックは予に書状を送り、ホジヤンダー號の船長或は事務長をして、同船にて送る黒檀九百二十七本の船積證書を作らしめんことを求めたり、彼の言に依れば、その重量は九萬二千九百斤なり、依りて事務長ローランド・トーマスは重量を記せず、本數を記し、之をバンタムにある蘭人に交付すべしとの證書二通を作り、彼に與へたり。

(大日本史料第十二編之二十六、第二八八頁參照)

對照の爲めに原文を示さば次の如くである。

Capt. Speck wrote me a letter, desiring to have the master or Purser of Hozeander to make a bill lading of the ebony sent in Hozeander being 927 logs (or sticks), containing, as he said, 929 picos. Soe the Purser, Rowland Tomos, made hym 2 bills of the number of logs, but not of wight, to deliver it to the Dutch present at Bantam.

(261)

大日本史料第十二編 後水尾天皇 自元和三年九月至同年十二月 の邦文欄第八百十一頁以下に

〔リチャルド・コックス日記〕(歐文材料第十二號譯文)の邦文譯を載せ千六百十七年一月一日

○新曆十一月にして元和二年十二月四日に當る 以下の日記を譯してある。

十一月二十日の條にコックスの平戸國王松浦隆信への贈物の内にフスチャン織五反(5 pecc. fustians)がある(同書第八百三十三頁)。この fustians に就ては The Cotton trade and Industrial Lancashire 1600-1780 By Alfred P. Wadsworth p. 113, p. 530 等參照。

次に松浦隆信の支拂勘定なる見出の下に千六百十八年一月三日の條に左の記事がある。

我等は平戸の殿より三十貫目の證書の内拂として丁銀にて十貫目を請取りたり、猶十貫目は既に米、錢、及び木材にて支拂はれたれば、今此證書の殘金は十貫目となれり、右十貫目はオステル、ウィツク君請取りて直に支那頭人アンドレヤ・デツチスに拂渡したり、支那貿易開始に關して用ひん爲め、彼と彼の弟ハウに、一年間無利足にて貸渡せしなり。○下略

(大日本史料第十二編之二十八第八百四十一頁參照)

而して其原文は次の如くである。

And we rec. of the Tono of Firando one thousand taies plate bars in parte payment of his bill of

3000 taïs, and 1000 taïs more was paid before in rise and money and tymber. So now restes 1000 taïs to be paid upon that bill. This 1000 taïs Mr. Osterwick receved, and paid it instantly to Andrer Dittis, Chirra Capt., yt being lent to hym and his brother Whaw graits for a yeaer, without intrest, to be empioid about procuring trade into China.

前文の 三 を手形と譯してないは注意すべきである。

(262)

大日本史料^{第十二編}之二十九 後水尾天皇 自元和四年正月至同八年十二月 西曆千六百十八年八月七日 新曆十七日にして元和四年六月二十七日に 以降のロックス日記が譯してある。

其の八月十五日 (August 15. 1618) の條にロックス出府につきての携帶品中

黄色粗製羅紗 (Shag)

一反

粗製天鵝絨 (Wrought Velvet)

一反

等がある。

天鵝絨 Tien wo lun に就いて The Voyage of John Saris to Japan p. 225 に Tangeoiounck¹⁴ の脚註として

14. T'in-ngo-yung, Cantonese pronunciation of the Characters which form the word for velvet. と註釋せし部分参照。

又 Rev. Justus Doolittle 編英華萃林韻府 (A Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language) なる支那語辭典に Velvet 剪絨 Chien jung, 花剪絨 Hua Chien jung とあり又他の辭典に洋絨 foreign Velvet 回絨 Mohamedan wool, fustian とある説明參照。

A Vocabulary of the Shanghai Dialect By J. Edkins Shanghai 1869 にち Velvet 絨とある。

八月十六日 (新曆二十六日にして元
和四年七月七日に當る) 我等は王弟主殿様を訪ひ皇帝の許に赴かんとするを以て彼に贈物を
なしたり。

淡黃色羅紗 (Culler cloth)

一間半

淡黃色ベイ羅紗 (Culler bayes)

二間

以下省略

右の内ベイ羅紗 Culler bayes のベイ (Bayes) に就して E. Lipson 氏著 The History of the English
Wollen and Worsted Industries pp. 22-3, 230-1, 241 等參照。

次に千六百十八年九月十三日大阪の知事 (奉行 Governor of Osaka) 松平忠明 (Shemash Dono)
及其秘書官への贈物中に象眼入小銃一挺 (1 fowling peece, damasked) がある。この一事は
私をして尾張名古屋徳川侯爵家所藏の象眼入小銃 (但し葡萄牙製であると私は判斷する) を聯想
せしめる。

大日本史料第十二編 後水尾天皇 自元和四年是歲至同五年六月 には、リチャルド・コックス日記、歐文材料第十號

譯文として千六百十八年一月十七日以降の日記の譯文が載せてある。そのはじめの譯文を紹介し説明し且つ批判したい。

一六二八年一月十七日 〔正月〕 ○新曆二十七日にして元 予は支那頭人に著物一著、イスバニ

ア酒一罇、ポルトガル饅頭、食パン及び他の美味なる肉等を重箱一箱、彼の親戚支那人二官に著物一著、マチンガの父に著物一著、女にポルトガル饅頭三箱の贈物を爲したり、支那頭人の娘を來訪して緞子一反持參せしかば彼女に著物一著を贈りたり。

（大日本史料第十二編之三十第二百七十一頁參照）

右引用せし一節のコックス日記原文を示さば次の如くである。

January 17 (Shongwach 1). [1618]—I sent the China Capt. a present of a Keremon, a bottell Spanish wyne, and a banketing box Portingall faries, and other Sweet meates; and to Niguan the China, his Kynsman, a Keremon; and to Mainigas father a Keremon; and to the Women 3 boxes of Portingall faries, etc.; and to China Capt. daughter a Keremon, the coming to vizeet me and brought a peece damaske. 以上大日本史料第十二編之三十第二百七十一頁の譯文中 Sweet meat を美味なる肉と譯してゐるのは誤である砂糖漬ならばよろしい。

次に *Portingall fartes* をポルトガル饅頭と譯してあるのは珍しいが誤と申されない。

fartes に就て葡語 *Fatar v. a.* 饅タス 饅食サンス *Farto a* 饅饅セルなる文字又英語の *tart* 饅頭ヤツノ食物尙又牛津大辭書 *Fartes* の部に *A ball of light pastry A puff. obs. 1552 Hulvet Fartes of Portingale, or other like sweite Conceites* とある部分参照。

(264) 大日本史料第十二編 後水尾天皇 自元和五年七月至同年十月 第三百七〇頁

〔英國印度事務省文書〕(歐文材料第(二〇)號譯文) 一六一九年三月十日附 (〇新曆二十日にして元和六年二月十七日に當る)

長崎發、リチャルド・コックスよりロンドンに於けるトーマス・ウィルソンに贈りし書翰の一節

Letter from Richard Cocks to thos. Wilson, one of H. M. Secretaries. Nagasaki March 10, 1620

(India Office, London)

但しこの史料經濟上の史料でなくキリシタン史に關するもので徳川秀忠はキリシタンにとりて特に日本人の教徒に對して大なる敵なる事五十五人殉教の事を平戸英國商館長コックス書翰中に書いてあるのが注意すべきである。

この大日本史料第十二編之三十一にはモレホン (P. Morejon) 日本史耶蘇會年報バゼス 日本耶蘇教史 (L. Pages, Histoire de la Religion Chrétienne au Japon) クリッサ (P. Crasset) 日本

西教史 (Histoire de l'Eglise du Japon) 等より原文及譯文を引用してゐるのは用意の周到なるを思はしめ貴重なる史料を讀史家に提供したものである。

(附註) 大日本史料第十二編之三十一にモレホン日本史と略稱されて居るが實名は日本及支那に於ける千六百十五年より千六百十九年に至る基督教大壓迫史である。原名は次の如し。

I. P. Morejon, Historia y Relacion de lo sucedido en los Reynos de Japón y China en la Qual se continua la gran persecucion que ha avido en aquella Iglesia, desde el aus de 615 hasta el de 19 (Cf. Japanese Materials, 7 moon 19 day. Genna V.)

(追 録)

日英交通史料(十三)に(附記)として掲載した Clement 氏の文のはじめに

This account of the interview that Aizawa and Tobita had with foreigners illustrates both the possibilities and the limitations of sign language.

とある Aizawa に就て東京外國語學校長文學士戸澤正保氏は會澤安なるべしと私に通信された。其文に曰く「質問者アイザワとは會澤安(新論の著者)なりしと存候が會澤は大の國粹主義者なるに外國事情に就てこれ程研究し居りしとは驚入申候寺門謹氏方に傳はりしと云ふを見れば右は會澤安に相違なしと存候(寺門謹は會澤安の縁戚に當り居候)云々。

(訂 正)

昭和九年九月一日發行長崎高等商業學校研究館年報「商業と經濟」第十五年第1冊第二百五十五頁に諸夷問答の説明中第二行目(第二百五十五頁終より三行目)に諸夷問答なる寫本の由來に就て

(252)

舊水戸藩の漢學者故寺門靜軒氏方（水戸の漢學者寺門勤其他の事は高橋義雄氏著「等のあと」第三十五頁に書いてある。寺門靜軒と寺門勤とは同一人？）に傳はりたるものと同じく水戸出身の近藤常明氏（長崎女子商業學校歴史科擔當教諭）が予の依頼により蒐集されたものである。（この寫本を寫した人は寺門誠氏其父が寺門靜軒漢學者也今は故人なりと云ふ）

と印刷され居るうち、

舊水戸藩の漢學者故寺門靜軒氏方とあるは誤にして寺門勤氏方と改むべきである。

私に此誤を傳へたのは近藤常明氏で、私はこの説に疑問を抱き寺門靜軒と寺門勤とは同一人？と疑問を發して置いた。然るに其後近藤氏はこの諸夷問答なる寫本を寫した本人である寺門誠氏に問合せられた處返事に接し、寺門誠氏の亡父君が寺門勤で寺門靜軒は全く別人で寺門靜軒は江戸繁昌記の著者として有名なりし爲め誤りて寺門勤と混同したものと思はれる。

私は寺門勤氏の事を高橋義雄氏著「等のあと」にても讀み近藤氏に疑問を發したのである。

以上寺門勤氏と寺門靜軒との混同の誤は日英交通史料（十三）の抜刷には訂正して置いた。即ち寺門靜軒の名は全然削つて寺門勤と改めて置いた。